

高円寺家嫡男は拗らせ系男子という概念

sparekey@設定厨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高田寺嫡男が好きな人の為に原作を駆け巡る話。

※但し、主人公の性格は屑だとする。

目次

EP	根が悪い男	1
EP	一億の女	6
EP	n度目まして。	11
EP	茶柱佐枝という女	17
EP	平田洋介という男	26
EP	コミュニケーション	31
EP	僕と桔梗	36

EP 根が悪い男

もう何度目のため息かと思うほどに僕は深く深くため息をついた。去年あたりから僕の運気が底値を更新しっぱなしや。

もう疫病神みたいなんが団体さんでお越しになってるんとちゃうか？

栄えある名門校に入学をしたにも関わらず

僕が朝からため息を溢しまくっているのには理由があった。

× × ×

東京国立高度育成高校。

この国で数ある名門国立高校の中でも恐らく一番金がかかっている学校。

都内の埋め立て地まるごと街にして、そこ全て学校の敷地です。

なんて馬鹿が考えたような程に規模の大きい全寮制の学校だった。

敷地内の設備は最新鋭で揃えられていて生徒はもちろんそれらを使えるらしい。

個人的には名門校と最新鋭の設備っていうのが相反するように感じるけど

それはまあ、個人的な感想やからどうでもええねん。

問題は、僕がこの学校に心の底から行きたくないってこと。

両親にもその旨をしつかり伝えてんけど

普段は僕に対して甘々やのに、生まれて初めてここに通うように命令された。

そりゃ親としてならぶつちしても良かったんやけど

高円寺家当主として命令されたんなら僕も逆らわれへん。

本心では嫌々な気持ち全開やつたけれど

決まったことにごねて文句垂れても仕方がないのでしっかりと覚

悟を決めて入学した。

そんな矢先、全寮制の学校へとバスで向かう道中いきなり知らないOLに声をかけられた。

「あなた席を譲ってあげようって思わないの？」

いきなり人の目の前まで来て怒鳴りつけるOLに驚きを通り越して心配になった。

「なんやこいつキ●ガイか？」

そんな本音を隠しながら僕は馬鹿でも解りやすいようにならなく優しく笑顔で返した。

「いきなり出てきて怒鳴り付けるなんてえらい変わった挨拶やね。何処の国の人なん？」

なるべく丁寧に話したつもりだったが、その言葉が上手く伝わらなかったのか

OLは顔を真っ赤にして先程より大きな声でがなりたてた。

「そこは優先座席よ!!お年寄りに譲るのは当然でしょ!!!」

「自分変わった常識の中で生きてきたんやねえ。」

席を譲る譲らん云々の前に

いきなり出てきてわめき散らかしてええ道理はないやろ？

ええ子やから、もう大人しいとき。」

「どうやら言葉が通じないみたいなので

もっと優しく言ってあげたのに更に五月蠅くなってしまった。

最近の若者はキレやすいとは聞いてたけどほんに都会は怖いな。

でもまあ、常識を説いてあげんのも持つ者故の勤めって言うからなあ…………。

「それが目上の人に対する態度!？」

その言葉に今度は素直に驚いた。

「一体どういう原理で生きてきたらそうなるんやろうか…………。」

「目上……………えっ……………自分何で僕より偉いて思ってるん?もう怖いわ。」

「なんて言うか…………異次元の生物と話してるみたいな気持ちになっ

てきた。

隣の席で座ってるうちの子もぶるぶる震えてるやん。

「なっ……!! あんた高校生でしょうが!! 大人のいうこと素直に聞きなさいよ!!」

気づけばいつの間にか俺の斜め前に居たお婆さんはOLに

これ以上騒ぎを大きくしたくないのか、なだめているが

OLの怒りはなぜか加速する一方だった。

「も、もう、いいですから……。」

「ほんま変わった常識の中だけで生きてきたんやねえ。お婆さんも巻き込まれて可愛そうに。」

OLはキツと音がしそうな程、僕を睨み付けて老婆に弱々しそうに謝罪していた。

一体なにに対する謝罪なのか。

それは席を奪い取れなかったことなのか。

それともでしゃばって事を大きくしたことなのか。

まあ、謝つても済まさんけどね。

我が家は「売られた喧嘩は相手の家ごと更地にして返せ」言うのが家訓やから。

そんな事を考えている間に今度はまた別の人間がしやしやり出てきた。

「あの……私も、お姉さんの言う通りだと思うな。」

いや、つていうか榎田桔梗やん。

なんやコイツ黙って転校した僕への嫌がらせか？

榎田はOLの横に立って、それはそれは薄っぺらい笑顔でこちらに説明しはじめた。

「さっきからずっと辛そうにしているみたいなの。

席をお婆さんに譲ってもらえないかな。その……社会貢献にもなると思うの。」

僕はお婆さんの方に向かい合うように手を差し出す。

「ほな、どうぞぞ。」

呆気にとられてるOLと櫛田を余所目に僕はお婆さんを席にエスコートした。

僕はそのまま席を立ててふるふる震えてた佐倉愛理の手を握りしめながら

周囲に聞こえる程度の声でOLと櫛田に話しかける。

「ごめんなあ愛理ちゃん。

君が痴漢にあつてからこういう人混みは

震えてえずいてまうくらい怖いんは理解してんねんけどな。

なんやいきなり怒鳴り付けて席寄せ言うのが東京の常識らしいんやわ。

いきなり知らん人から怒鳴られて怖かったやろ?」

その言葉で周囲で様子を伺っていた人たちも「可哀想」「あのばあやバすぎっしょ」なんて話始めた。

いやいや君たちも見ただけやん、なんて本音は隠してOLさんを見ると

「えっ」「あ……でも、」だとか声を漏らしながら立ち尽くす。

老婆はもう腰が折れ曲がるんじゃないかと思うくらい縮こまっていた。

僕はそんなOLに向かって今日一番の笑顔で話しかけたった。

「でも、安心してな。

この僕の大事な大事な愛理をこんなに怖がらせたんや。

あのOLさんは僕より偉いらしいから何処まで戦えるか解らんけど

高円寺財閥総出で絶対に地獄の果てまで追いかけて潰したるからな。」

震えてる愛理は手を握ってきたので両手で包むように握って
僕は愛理に向かって話を続ける。

「心配せんでも大丈夫やで。」

今時アホみたいだな社会通念しとる人を雇ってるような会社や
さっさと潰れてもうた方が社会の為や。これも立派な社会貢献
や。」

うんうん頷きながら。

僕は改めて社会貢献の大事さを学んだ。

「やっぱり塵はちゃんとゴミ箱に居てもらわなな。」

何回転職しようが何処に逃げようが、絶対に詰めたるからな。」

丁度到着したバス停に愛理をエスコートしながら僕はOLさんに
最後の忠告をした。

「あ、せや家族にもしつかり責任とってもらわな。」

三等親以内の人間はみいーんな突然の不幸に合う予定やから
ちゃんと誰のせいで不幸になんのか説明しとくんやで？

何も知らんまま事故にでも合ったらさすがに可哀想やろ？」

OLさんは体調でも悪くなったのかえずいて顔も真っ青やった。

「ほな、さいなら。」

バスを降りた僕の後ろではなぜか発狂した様な女の人の叫び声が
聞こえたけど

僕は入学式に気持ちを切り替えて向かった。

×

EP 一億の女

「いや、君はいい加減笑いすぎや。」

バスの時からずっと隣で笑ってた愛理を流石に突っ込む。

君、僕が上手いこと立ち回ってなかったら変な子まっしぐらやったで？

「だ、だってほんとにこんな漫画みたいに運が悪いことが初日から続くなんて

ぴーちゃんの不幸が久々に面白すぎてっ

本当はあの人高円寺家の仕込みとかじゃないの？」

「相も変わらず僕を阿呆鳥みたいなあだ名で呼ぶんやなあ。

あと、さっきの人は残念ながら仕込みでも何でもないで。

正真正銘初対面でいきなり因縁つけられてんねん。」

まあ僕の不幸はいまに始まったことやないからもう慣れたけど。

生まれつき運が悪いと言うか巻き込まれ体質というかなんとか。

「僕は昔から死ぬほど運が悪いからね。」

「ぴーちゃん可哀想。よしよし。」

「君は本真に煽ってるのか天然なんかわからん子やなあ。」

優しく頭を撫でる愛理を僕は困った顔しながら見つめる。

こんな関係がもう何年も続いていまにいたる。

僕ら二人は早い話が幼稚園からの幼馴染みやった。

ご近所さんってのもあって僕は愛理を気に入って滅茶苦茶遊びに連れ回しとった。

何処に行くのも何すんのも一緒やった僕らはいくつになっても変

わらずに連るんで

そんな当たり前の毎日は中学生に入学しても変わらんかった。

そんなある日にこの子は突然役者になりたい言いよったんよ。

この頃には僕の両親に愛理を紹介して

愛理の両親にも挨拶に行った。

僕の両親はなぜか酷く驚いた顔をしてたけど仲の良い僕らを見て喜んでたわ。

せやけど、この頃からあたりから僕らの関係は徐々に変化していった。

愛理は夢の為に、あんまり遊ばんようになった。

僕も恥ずかしい話、思春期というかなんというか……。

変に愛理を意識し初めて少しずつ距離を取るようになったんよ。

愛理は役者になる為に、劇団に入団したり

タレント事務所に所属したりで忙しく

僕はその頃に初めて自分の価値を知ったんや。

今まで何をするのも愛理と一緒にやった僕は初めて他人と自分を比較することを覚えた。

どれだけ自分が優れてるのかを相対的に知ったんや。

他の凡人が何年もかかるようなことを僕はすぐに覚えるし

なんやったら凡人共の努力なんて嘲笑うような結果を出しまくった。

要は力をひけらかしとったんや。

何しても優秀やと褒められて、勉強もスポーツでもアホみたいに活躍しまくった。

今でも親の書斎にはその頃に荒稼ぎした賞状やらトロフィーが飾ってある。

僕はそれを見ると、今でも胸が痛くてええきそうになるけど……

親からしたら子どものそういうのは嬉しくて仕方なかったんやと思う。

ほんでお互い一週間くらい会わへんのが日常的になってきたくらいに事件は起こったんや。

僕は今でもこの頃の自分を思い出す度に自分を殺したくなる。

その頃の僕は有頂天になって、天狗になって

ついでに鼻唄まで歌ってご機嫌に歩いてたんや。

ほんで僕はその現場にたまたま遭遇した。

…：愛理が十数人に囲まれて脱がされそうになってた。

しかも顔も殴られたような痣をつけて。

そっからは今でも思い出したくないくらい滅茶苦茶に暴れたった。

女も男も教師も警察も誰も彼も暴虐の限り暴れまくった。

教室には血とか髪の毛とか、耳の欠片とか散らばってた気がするけど

僕は全然暴れたらんかった。

結局両親が当主として出張するような嵌めになったってことと

翌日から一クラス丸々なくなってもうた言うくらいには悲惨な結末になった。

幸いなことに警察のお世話には並んで済んだ。

取り敢えず言えるのは、実家が昔からある名家で良かったわ。

僕はまだソイツらのこと忘れてないし許してないけど。

僕にとっての問題はそっからやった。

何で愛理がそんな目に遭ったか。

全部全部僕のせいやった。

僕が今まで散々踏み潰してきた塵粕が八つ当たりで愛理をに手を出したんや。

そつから僕はおかしくなったんやと思う。

僕は愛理のすべてを管理するようになった。

今でも思い出すとその頃の僕の執着はキモかったと思うわ。

学校では誰と何処に何をして居るのか。

誰と話して、誰と仲良くして、誰に何を言われたのか。

家では何を食べて今日は何着て何処に出掛けるとか。

芸能人として何処に所属して、どんな仕事して、どんな方針で営業していくのか。

事務所も仕事も当たり前のように家の権力使ってもらうように駄々こねた。

愛理も「うん、えつとね、わかった、いつもありがと」なんて無邪気に従ってくれるのをいいことに僕の要求はどんどんエスカレートしていった。

両親も最初は過保護になってんのやろうなあ。程度やったんが段々過剰になってく僕を心配して僕だけ転校させられた。

一旦距離を置いて、冷静になったら解る。

あん時の僕はほんま死ぬほどキショかった。

普通に考えて束縛メンヘラドブくそ男やん。

言い訳するなら、あん時は不安で怖くて仕方がなかったんや。

なんかあったらどうしよう。なんかあったらどないしたらええねん。

それはっかり考えてた気がするわ。

この高校の合否が決まる頃に家族の了承貰って僕らは再会したけど

そんな僕を愛理は昔と変わらんようにぼやぼや笑って許してくれた。

むしろ再会を心から喜んでケーキまでご馳走になったわ。

ほんのすこーしだけ、この子にも問題あると思うのは僕だけなんかな。

こういう経緯があって僕らは今も一緒の学校に通えることになった。

昔は、ひたすら愛理を振り回してたのに、いまでは愛理に頭上からんなって

日に日に天然に拍車かかっていく愛理にむしろ振り回される日々や。

まあ、愛理に言えんことは今でもたくさんあるんやけどね。

例えばここに入学する迄の準備金に一億以上使ってもうてるとか。

EP n 度目まして。

「ほな、僕はクラス掲示板見てくるからここで待つとき。」

愛理を日陰に座らせて猿みたいにうじやうじや群れてる人混みを掻き分けて僕はクラス掲示板に向かった。

愛理にはああ言つたけど

ほんまに配属されるクラスを見に来た訳やない。

さつきから僕らを見てる視線を感じる。

それ探すために僕は愛理から離れた。

そもそも僕らがDクラス落ちこぼれに配属されることを知っているしね。

僕はこの学園の実力主義の意味も

Sシステム言う制度も入学前から把握しとる。

このシステムって何で一般的に秘匿出来てるんかいまいち理解出来へん。

僕みたいに両親がここの卒業生やった場合、なんの意味もなくて？

ネットで調べて見たら

ホラ話みたいな情報から、ほんまに実在する規則やイベントについての情報も

いくつかネット掲示板に乗ってたわ。

こん中から実在するルールを精査するんは難しいやろうから

一応の意味はあるんかもしれんけど……。

たぶん何人かは僕みたいに事前に知ってて入学してんとかやうんかな？

そんな益体無いこと考えていると

目的の人物が僕の背中に耳をあてるようにもたれよる。

さつきからずつと僕と愛理を睨み付けてた視線の正体。
僕はあえて人混みに紛れて誘き出そうとしたんやけど……。
全然知ってるヤツやった。

「バスのあれ、何の嫌がらせなん？」

「勝手に居なくなつたという第一声がそれかよ。」

囁くような声なのに透き通るようにな綺麗な声。

背中越しの女はきつと今も見惚れるような笑顔で周りを欺きながら

僕にしか聞こえへん声量で汚い言葉で話してる。

久々にそんな姿を思い出して笑ってまう。

僕らは半年程度の付き合いやけど、なんと言うかコイツとは馬が合う。

「べつに君がこの学校に入学してくるのは解ってたもん。

僕も僕で色々忙しかったし大変やったんよ。

それとも、僕がおらんくて寂しかったんか？」

「……寂しかったって言ったら、どうにかしてくれんの？」

「あほか。それよりええ加減離れえや。」

櫛田桔梗

僕が愛理と離れてる間に放り込まれてた進学校におった学年一の問題児。

噂では彼女は学園のマドンナのような存在だったらしい。

でも、僕が転校して来た頃にはその面影なんて一ミリもなくてヤサグレたOLみたいな女に成り下がった。

詳しくは知らんけど

桔梗はみんなに好かれるような人間を演じて生きてきたらしい。

けれどもこの子かてストレスの限界があるわけ

それをSNSだかブログだかに愚痴つとつたら

なんと偶々それが同級生に見つかつてアホほど叩かれた、言うんが経緯らしい。

情報社会はほんま怖いなあ。

ほんで詰め寄つて来た奴等に桔梗は開き直つて

全部全部抱えとる秘密とか愚痴を吐き出して自爆特攻かましたら見事に学級崩壊したらしいわ。

それを聞いた時、腹抱えて笑つたわ。

僕は、何も出来へん雑魚が群れてんのが死ぬほど嫌いや。

そういう雑魚は口だけは大層御立派なこと言う癖に口先だけで何もせーへん。

キーキー喚いて群れる猿みたいなもんや。

僕は産まれてこの方みんなに好かれたい、なんて一度も思ったことないけど

欲しいものの為に自分が持つてるもん使つて何が悪いねん。

それで最後に自爆特攻かまして

ちやつかりトドメ刺してんのがもう最高やね。

そうやって笑つてやつたら

桔梗から警戒心とか疑心感みたいなのがどんどん薄れていつて

あげくの果てにいつの間にか僕の引越し先の家に

普通に遊びに来たり、ご飯作りに来たり

掃除しに来たりするようになった。

まあなんで世話になつてんのか言うとな

僕の転校は事情が事情だけに急に決まったもんやから

実家からのハウスキーパーとかの手配が間に合つてなかつたんや。

それに僕、産まれてから一度も家事したことないし。
実家では専属の人間雇ってるし。

僕みたいなもんが家事なんて出来るわけないやん。

そうやって開き直って言ったら

僕をアホみたいないな冷めた目をして「これだから金持ちの坊っちゃん
は」「普通遊びに来るって言うてるのにこんなに散らかす?」なんてグ
チグチ文句垂れ流しながら世話やいてくれたんがこの子やった。

まあ、その後ハウスキーパーが手配されてもちよくちよく遊んでた
けど。

今思うとそこまでしてくれた人間に対してちよつと冷たすぎたか
なあ。

「ま、埋め合わせやないけど後で色々教えたるわ。」

「あつそ。」

素っ気ない声で返す相手がそつと離れる。

振り返えることなく櫛田桔梗は人混みを離れて行った。

……ええ感じで離れていったけど君、僕とおんなじDクラスやで。

この後、教室で再会すんの気まずくない??

× × ×

Dクラスの教室に向かう道中。

僕は愛理にひとつ頼まれごとをした

「ねえ、ぴーちゃん。お願いがあるの。」

そんな言葉から始まった彼女のお願い事に僕は正直複雑な思い
やった。

「学校が始まる最初の一ヶ月の間、私に関わらないようにして欲しい

の。」

僕は一瞬で心臓が酸橘スダチくらい小さくなったんか思うくらいキュツとなった。

「えっ……え、なん、えっ？うそやん。」

何て言葉が続けてええか解らんなってパニックになってたら愛理は嬉しそうに僕を抱き寄せて事情を説明しはじめた。

何でもそういう視点でどんな人がいるか見ときたい

愛理なりの人間観察というか処世術みたいなもんらしいわ。

僕がいるとどうしても僕を通しての人柄しか見えなくなるらしい。

“愛理が進んで変わりたいと願うんなら僕はそれを応援する。”

僕は誰かに宣言したわけでもないけど

愛理が役者になりたいと決めた時からそう決めてた。

僕にはよく解らん方法やけど

それは愛理にとつては大事なプロセスなんやろう。

なら、ここは見送ってやんのが僕の努めや。

束縛して強要するような

アホ粕迷惑バカ男になんて僕はなりたくない。

「まあ、あれや。うん……まあわかったわ。」

………しんどなったり何かあったらちやんと言うんやで？」

愛理は僕をもう一度力強く抱きしめてから

小さく「いってきます。」と離れていった。

化粧直しに行った彼女を僕は自分が思ってたよりもずっと弱々しい声で「頑張つてな。」と返した。

まあ、あれや。うん。

何か、もうその辺の床でもええから寝たくなってきた。

いやいや、あかんあかん。
僕がすっかりせな、何かあった時にどないすんねん。

そんな独り言を都合5回程繰り返してDクラスの教室に入ろうとした時

見覚えのある女の子からいきなり声をかけられた。

「君も新一年生だよな？私、櫛田桔梗っていうのよろしくね。」

胡散臭いほどの綺麗な笑顔と、甘ったるい外国のお菓子みたいな声で話しかけて来た人は

さつきぶりの櫛田桔梗やった。

僕はそのまんままるではじめて出会ったような顔をして挨拶を返す。

「僕は高円寺司や。桔梗ちゃん言うんやね、よろしゅう。」

だって目が死んでるんやもん。

君、たった数分で何があったん？

まるで殺したはずの仇敵がゴ●ブリみたいにな

わらわらわいてきたみたな目してるで？

僕は通りすぎ様に耳元で呟いておく。

「あとで説明せえよ。」

「ん。」

喉をならすように返事した桔梗は作りもんみたいな笑顔のまま教室における他の子に話しかけに行つた。

何で僕は、入学して早々馴染みの子らに知らん顔せなあかんねんど真ん中に割り当てられた自分の席に座って僕は頭を抱えた。

×

EP 茶柱佐枝という女

EP04 茶柱佐枝という女

教室にはDクラスを担当する茶柱佐枝教員が

自己紹介も兼ねたこの学園の基本的なルールの説明しはじめた。

「新入生諸君。私はDクラスを担当することになった茶柱佐枝。

教科は日本史を担当している。

この学校は三年間クラス替えが存在しない。

よって三年間、私が担任を勤めることになる。よろしく。」

酷く胸元の開いたスーツを着こなし

綺麗にまとめられたポニーテール、すこしキツイ印象を与えそうな

目元に固い口調。

相反するような服装のルーズさとの印象のアンバランスさから

彼女の癖の強さを感じる。

「今から一時間後に入学式が体育館で行われる。

その前にこの高育校の特殊なルールについて資料を配布する。」

その資料にかかれてる内容は

以前入学案内に同封していた資料に書かれていることと

ほとんどおんなじやった。

追記で書かれてる、Sシステムについてと学生証端末については

後々にでもよく目を通してないとかかん。

茶柱教員の説明は簡単に言うとは

他校にはない本校独自のルール説明やった。

要約すると――

- ・ 敷地内にある寮での生活を義務付けること。
- ・ 敷地外に許可なく出ることを禁止。
- ・ 特例を除き、外部との連絡は一切禁じていること。

そして肝心要のSシステムと学生証端末について。

「今配った学生証端末には10万ポイント既に入っている。

このポイントは1ポイントにつき1円の価値があり

学園では毎月1日にポイントが自動的に振り込まれる仕組みになっている」

学生証端末に入っている金額に周囲は騒がしいけど、僕からしたら少なすぎる。

こんななんええとこで飯食べたら一回でなくなつてまうやん。

そんなことを考えながら茶柱教員の説明に耳を傾ける。

「このポイントは敷地内の施設、サービス全てで使うことができ

学生証端末を通したり、提示することで使用可能だ。

まあ、一度使ってみればわかると思う。

そしてこの学園の敷地内においてポイントで買えないものではなく何でも購入可能だ。」

どこもかしこも喜色一面という様子で

気の早いヤツは既に何を買うかの相談なんてはじめてるわ。

まあ、一般的に学生のお小遣いが月十万円相当は十分多いやろうからなあ。

来月に貰えるかはわからんけどね。

騒ぐ生徒を特にたしなめることなく茶柱教員はポイントの説明を続けた。

「ポイントの支給額に驚いたか？」

この学園では実力で生徒を測る。

入学を果たしたお前たちにはそれだけの価値と可能性があると学校が判断したと。遠慮することなく使え。

このポイントは卒業後にはすべて学校が回収することになっている。現金化なんて出来ないから、ポイントを貯めても得はない。」

クラスの大半はもうロクに聞いてないんちゃう？
それくらい浮かれに浮かれ、みんな端末に夢中だった。
まあ、この高校は倍率が異常に高く設定されていて
合格した先にこんな楽園みたいな生活できるんやから
そら、そうなるやろうなあ。
……ほんま可哀想に。

「もし、ポイントを使う必要がないと思ったものは誰かに譲っても構わない。

だが、カツアゲや脅迫のように無理に奪うような真似はするなよ。
この学校はいじめ問題にだけは敏感だからな。なにか質問は？」

僕はすぐさま手を挙げる。
すぐにでも教室から出ていきたくそうにしてるけど絶対に逃がさんで。

「聞きたいこととか言いたいことは3つ。

学園規則で緊急時での外部との連絡とありますが
どの程度でそれを判断すればいいのか。

また、その時に学園側が緊急時ではないと判断したときの罰則等について。」

茶柱は間を置かずにスムーズに答える。

まるでこの質問に対するマニュアルでもあるかのように。

「緊急時における外部との連絡、とあるが詳しく言うと緊急時には学園を經由してそれらの各機関に連絡する、という手順になる。

よってそのパターンでの罰則は発生しない。

まあ、イタズラ目的やあまりにも悪意を持って何度もかけた場合は別だがな。」

「次に先程先生の言い合った『実力で生徒を測る』その評価結果が『10万ポイント』とのことでしたが

その解釈やとあの辺いてるアホみたいな面したボンクラ男子生徒と

僕が同価値や言うてるように聞こえるんですけど
その解釈に間違いはないですか？」

僕は最後方窓際で騒ぐ男子生徒を指差しながら言うた。

山内春樹

僕がこの学園で唯一入学前から決めていた排除対象。

父様曰く

——覗きの常習犯で佐倉愛理くんみたいに気の弱い女生徒に何度も言い寄っては断られる度に相手をボロカスに扱き下ろすような粕の中の粕。

この学園に入学したら彼のような人間が愛理くんに近寄らないように気を付けなさい。

僕は別に愛理が特別気が弱いとは思わんけど

父様の情報収集能力がずば抜けてんのは知ってる。

高円寺財閥がここまで飛躍したんも

父様個人のそういった能力の高さがあつたからや。

故に、山内春樹。

お前には絶対に消えてもらう。

見極めるなんて悠長なことはせん。

出来るだけ最速最短距離で排除、もしくは無力化させる。

僕が思考にふけってる傍らで

茶柱教員が初めて言葉を詰まらせとつた。

「……そういう解釈になるな。」

「それって流石におかしなですか？」

見た目や成績、内申に課外活動での実績。

もつと分かりやすい目安で言えば稼いだきたお金。

こう見えて僕は既に学生しながら社会でお金を稼いでます。
一般的な高校一年生と既に社会にも出て大金を稼いだ実績のある
僕。

それで平等に10万ポイント言うのは
さすがに計算が合わんのとちやいますか？」

会社だってそうや。

前職での実績や経験に資格。

それらによつては待遇や立場も変わってくる。

それは給与という面においても当然変わってくる筈や。

茶柱教員は表情を変えずに

「この学校ではありとあらゆることが評価対象とされている。

未だ中学生のお前が稼いだ金額などたかが知れている。

その稼いだ金額がお前の言うその辺の男子高校生の将来性と比較
した結果

等価値と判断したまでだ。」

これは……

僕は中学生の時に年間38万を優に越えてる金額を稼いでる。

中学生は義務教育やから副業扱いになるけど

それを教員側は知らん……？

運営側が知らんのはがつつり納税してることからありえへんと思
えて

教員側は生徒の個人情報に制限があるんか……。

これを知れたのはデカイな。

漏らしてもええ情報とあかん情報見極めなあかんわ。

「国公立は非公務員型の法人職員やから

給与は大まかにしか分からんけど800万あったらええほうやろ
？」

僕の昨年度の給与とライセンス使用料とか全部合算したら
2億5千万越えてるんやけど。」

「それは……。」

「さっきの評価のうんぬんの話に戻すけど

茶柱教員が僕を評価する側やとして

君より稼いでる僕を正しく評価できるとは思えんねんけど。

ほんでもってこうやって実際に、実績や評価を比較してみても

ここにおける生徒全員が等しく僕と同等の能力や結果を残せるとは思えないんやけど……。

うーん、いまいち納得できへんなあ。

それとも、平等じゃないと困る理由でもあるんやろうか。」

「……猜疑心が過ぎた考え方だな。」

「例えば

これは入学出来たことへのご褒美ではなく

試験のようなものの一貫だとしたら？

それなら平等性を重視する理由も

先ほど茶柱教員が言いよった『入学を果たしたお前たちにはそれだけの価値と可能性があると学校が判断したということだ。』というのも違う解釈ができますわ。

だって、入学した生徒にしか試験資格なんて得られへんもんね。」

「どちらにせよ、お前に与えられたポイントは10万でそれは変わらない。」

「……まともな答える気がないならええですよ。

納得できる理由を自力で探すだけや。

ほな、もう一つ。」

さつき言ってた敷地内のもんは何でもポイントで購入できる言うてましたけど

僕、その席がいいんやけどなんポイントなん?」

僕が指を指したのは山内春樹のいる最後方窓際の席。

ここが全体が見渡せる唯一の座席。

そう思つて茶柱教員を見ると猛獣のような笑顔を見せて笑つていた。

獲物を見つけたような、捕食者の表情。

「ほう、よく気がついたな。

もちろんそういったことにもポイントは使える。

とは言え、毎度同じような注文をされて手間をかけられるのも面倒だ。

5万ポイントで手を打とう。」

高すぎやろうが。

こいつさつきの仕返しか?

そない高いなら買わんわ、とは言えんところが辛いな。

この買物は後々の大きい伏線にもなるし。

「ほな、入金しときます。」

「……参考までにどうしてこの席を買おうと思つたのか話してみろ。」

僕は文句たれる前にさつきと入金手続きを済ませる。

それにしてもなんや、僕がほんまに買わんと思つてたんかな?

それともこの席を5万で買う理由が検討つかんから教えるいうことか?

「逆に聞きますけど、話さな売らんつもりでしようか?」

「例えば、その席なら授業を真面目に聞かなくてもバレにくいからなんて理由なら教師として口を挟みたくはなる。当然のことだろう?」

「すくなくともそないな理由ではないですよ。僕に必要やからです。

それで、どうするんですか?

ポイントはもう払つたんや売らんか、売らんのか。はつきりせえ

や。」

眉間に皺を寄せて考え込むフリ「……」をする茶柱教員。

学園の規則は公平にする必要がある。

すくなくとも、外から見るときに公平に見えへんと

この実力主義の競い合いの結果が根底から歪むからや。

この学園の運営にどれだけの勢力の人間が関わってる思うてんねん。

それが『鼻肩してたから結果が正しく出ませんでした』じゃ大問題や。

公平性のない結果に誰が実力を見出だせんねんいう話やな。

だから教員一同は個人的な裁量権は持つてるやろうけど

それは過度な権力を与えられてるわけではない。

結果が教員個人の思想や欲望によつて変わらんとするためにもな。

せやから茶柱は席を売るしかない。

にもかかわらずこうやって考え込んでるフリをするのは

僕の思考や推察してることを他の生徒に見抜かせようとするためや。

心底アホらしい。

さつきも警告したやろうが

それはお前が僕の実力を上回ってるのが大前提やろうが。

運営側の人間が見極める能力を持っていて、初めて成り立つのがこの学園の教育システム。

僕みたいな人種にとって餌場にも等しいわ。

お前ら全員出し抜いて全部結果で黙らせたる。

絶対に佐倉愛理を退学にはさせへんからな。

×

EP 平田洋介という男

あの後、予想通り茶柱教員は席を売った。ありもせえへん職業倫理をたらたら語っていた割に僕が話す気ない思うたんか、すんなり取引は成立した。まあ、山内は散々文句たれてたけど。

僕が「ほな買ひ直せばええやん。」言うたら渋々新しい席に行きよつた。さすがに入学初日から持ち金の半分も失うのは嫌やったんやろうね。

茶柱教員が教室から去った後

僕に話しかけようとするDクラスの人間はおらんかった。

まあ、これだけの公の場所で初対面の相手らに

「僕が一番優れてるんじゃ!!他はカス以下じゃ!!」にも等しいこと言うたからな

こうなったんは自業自得みたいなもんや。

僕の周りだけ入学初日の雰囲気やのうて通夜みたいに静かになるとる。

すこし席の離れた所では頭の弱そうギャルの集団が

大声でウザそうに僕の悪口言うてるもん。

露骨すぎやろ、せめて陰口は陰でやれや。

もし君らの想像してるような

毎月10万貰えて娯楽施設も買ひ物も毎月しまくれるような極楽生活が全部紛い物で

僕の言うてる試験がほんまやと理解できた時に

君ら一体どういう反応するんやろうか。

「みんな、すこし良いかな?」

ギャル集団を可愛そうなものを見る目で憐れんできると好青年な男子生徒が教壇で話始めた。

「僕らは今日から三年間同じクラスメイトとして過ごすことになる。だから、自発的に自己紹介をして一日でも早くみんなと友達になれたらと思うんだ。」

入学式まで時間もあるしどうだろうか？」

そういつてクラス内の交遊関係を円滑にしようとする提案する、平田洋介を見て思わず落胆してしまう。

そうか……

平田くんは結局なにも選ばないことにしたんやね。それなら君は僕の敵じゃないわ。

唯一気にかけていたことが
思いもよらんタイミングで解決した瞬間やった。

平田洋介

入学前に調べあげたDクラス生徒候補のなかでもっとも父様の予測と、実際の情報の差が大きかった人間。そしてもっとも僕が仲間に囲いたかった人間。

父様曰く

——平田洋介くんは、中学生の頃に昔から仲良くしていた友達がいじめにあつて

それを自分がいじめられるのが怖くて見て見ぬふりしてたら友達が自殺未遂してしまって植物状態に。

それがトラウマになり争い事や喧嘩、もっといえばイジメが起こり
そんな切っ掛けを

徹底してなくしていくような生き方になった。

その結果、出来上がったのが

コミュニケーション能力も高く運動も勉強もある程度こなせ男女平等に接する理想の人間のような存在になる。

ここまで父様に聞いた時、僕は疑問に思ったんや。

何でそないな奴がDクラス落ちこぼれに来るんや、と

その経緯や過程が知りたかったんや

そこから自分の子飼いの人間に現在（中学三年時）の平田洋介について調べさせたら

理想の人間どころか分かりやすい程の恐怖政治しとった。

暴力、暴言、制裁。

イジメの主犯格に徹底的な罰を与えて主導権をなくしそれらすべてを使っていじめをなくしていった。

大声で威嚇して奮い立つように殴る様は気が狂ってるようやった、と

平田洋介を調べあげた人間に聞いたときは耳を疑った。

そこからは学級は崩壊したらしいけど

結局その後いじめはなくなったみたいやった。

そんな平田洋介に僕は共感にも似た感情がわいたんや。

君は才能も家柄もないけれど、一度は見て見ぬふりをしてもうたみたいやけど。

僕とおんなじや。

ないもん捻り出して足搔いたんやろ？

大事なもん傷つけた塵共を許せんかったんやろ？

怒りで頭ん中チカチカして片っ端からぶっ殺したくなってもた

んやろ？

ほな僕とおんなじやん。

大丈夫や。君がそのまま狂ったように壊れても僕が使ったるわ。

そのまま自分を鍛えて鍛えて鍛えて鍛えぬいて

片っ端から不愉快な塵共を処理して

大事なもん守り抜けるまで息も忘れて走り続けたら君はきつと――

――
そんで今現在の平田洋介を見て勝手に落胆した。

君は乗り越えることなく、見ない振りをして生きていくんやな。

そんな解りやすい弱点抱えたままじゃ

ほんまに守りたいもん何も守られへんやん……。

なんやねんそれ……。

僕は差別も区別もするし喧嘩もすし挑発もする

勝つためなら汚い手段も騙くらかそうが気にせえへん

弱者が僕の道を塞ごうと言うなら躊躇なく踏み潰すし

罰も私刑も良し悪しもはつきりつける。

知らん人間が何十人何百人死のうが

僕の大切な人が生きてくれてたらそれでええ。

お前もそうやったんと違うんかい。

大事なもん傷つけられて

二度とそないなことないように死ぬ寸前まで鍛え上げて

誰にも負けんように生きていこうとしたんちやうんかい。

傷つけられた現実トラウマと向き合い、足搔き、苦しんでたんなら

僕たちは友達共犯者になれる思うたのに

僕と平田洋介は絶対に相容れへん。

×

EP コミュニケーション

僕が平田洋介のことを考えてたら
いつの間にか教室の端っこから自己紹介するようになったらしく
背の低い女の子がボソボソと呟くように話してた。

「あの……えっと、いの、い」

一目で見えて分かる程にテンパっているイノなんたら少女。
そんな彼女の様子を見て「がんばれ」「ゆっくりでいいよ」なんて心配混じりの声援もあれば
馬鹿にしたような嘲笑混じりに応援をする人間までいた。
と、いうかさつきまで僕の陰口叩いてた粕やんけ。

別に僕は誰がどうなろうと関係ないけど。
逆に言えば、ここで意固地になつてまで
この胸くそ悪い空気のなか過ごす必要もない

パアアン

立ち上がって一拍手すれば周囲の人間は僕に注目する。
突然の奇行で先程まで彼女に注目していた視線がすべてなくなつたのを確認してから

僕は教室の対角線上にいてる彼女の目をしっかりと見て挨拶をする。

「僕は高円寺司や。」

高円寺財閥嫡男でゆくゆくは高円寺家を背負う人間や。
趣味は茶道をたしなむ程度に。
スポーツ全般は基本得意やから何でもできるかな。
好きな食べ物は、ハヤシライス。

この前人生で初めて食べて感動してからはそれがいつちゃん好き

や。

君の名前はなんて言うん？」

「えっ……？」

驚いて固まっている彼女に

なるべく優しい音で声をかける。

「えっと、イノ……かしら？がしら？どっちで読むのかな？」

「あつ、えっと井の頭です。井の頭心でしゅ」

緊張はまだ解けてないみたいやけど

彼女の視線はしつかり僕の目を見てる。

そこから普通に話すように、会話を楽しむように進めていく。

「僕は茶道とか好きやけど、こころちゃんは何が好きなん？」

「あつ、えっと編み物が得意です。」

相づちうつて、解りやすいリアクションで

すこしでもこの子の緊張が溶けるように

周囲の視線が気にならんくらい僕に集中させる。

「そっか、そっか。編み物は僕やったことないわ。」

逆に心ちゃんも茶道つてやったことある？」

「すみません、あのしやかしやかするお茶のヤツですよね……？」

テレビでしか見たことないです。」

「しや、しやかしやかかあ。」

なかなかおもしろい表現するやん。

謝ることなんてないんよ？

だって僕も編み物言われても全然わからんもん。

けど、それなら機会があれば僕に一杯立てさせてや。

ここで手にはいるかわからんけど僕の好物の和菓子とお茶は格別

やから。」

打算的なきっかけの会話やったけど

この子のリアクション、愛理みたいで面白いわ。

思わず本心から微笑んでまう。

「ぜ、ぜっお願いします！」

「そんなときに心ちゃんの編み物のことも教えてな？」

めっちゃええ返事しながら片手を天高く伸ばす心ちゃんが面白すぎて

予想外に癒されてもうたわ。

「はい!!」

「お互い知らんこと教え合えるんはこういう機会の醍醐味やね。

茶聖の御人も言うてたもん。一瞬一瞬の出会いを大事につてな。

ほな、みんなも心ちゃんのええところたくさん知れたやろうし

次の人に譲ろうか？」

そう言つて終わろうとすると、キョロキョロ辺りを確認して

やっと自分が自己紹介してたことを思い出したみたいや。

「え?……あ、ああ!!ありがとうございます!!」

「ほな、次は心ちゃんの後ろの子頼むわ。」

そう言つて座る。

なんやあの子すつごい天然さんやなあ。

あんな子が身内におつたら人生楽しそうやわ。

社交辞令やのうてほんまにお茶にでも誘つてみよかな。

愛理とも相性良さそうやし。

× × ×

そんなこんなで自己紹介も問題なく終わって

入学式も筒がなく終わって無事に寮に帰宅。

寮は生活に必要なもんは一通り用意されとつて

消耗品なんかを各自で買いにいかなあかん。

僕はその前にさつき寮のフロントで渡されたマニュアルに

目を通してる途中で致命的なミスをおかしていることに気がついた

「あかん。ここ、寮の癖に自炊必須やんけ。」

先入観なんか、僕の想像力のなさがあかんのか
察って普通ご飯作ってくれる食堂みたいなもんあるんちゃうんか
いな。

「完璧にぐ飯のこと忘れとったわ。どないしょ。」

時刻は既にお昼を過ぎた頃合い

自炊経験なんて学校で習った家庭科の授業だけや。

唯一の経験も僕は味見係やったし……。

「とりあえず、ぐ飯屋さん探そ。」

重い体を引きずるようにトボトボと部屋の外へでる。

明日から自炊の練習せなあかんやん。

ただでさえ最初の一ヶ月は忙しいのに。

行動予定の見直しを考えながら一階のフロントまで出ると

後ろから突然声をかけられた。

「やっと見つけた。」

「桔梗ちゃんやん。急にどないしたん？」

汗ばむ額をぬぐいながら桔梗ちゃんは荷物を持って僕に話しかけてくる。

「なんや変なところ見られてもうたな。」

「ぐ、ぐ飯。どうせ忘れてるでしょ。」

寮では自炊だつてさっきマニュアル見て慌てて買い物行って来たの。」

「ええ、なんや君あの気持ち悪いヒロインモードみたいなんで話してたやん。」

友達付き合いつか出掛ける思うてたわ。」

何でか桔梗ちゃんは頬をピクピクさせて

苦笑いしながら荷物を僕に渡した。

「なんなんこれ、ぐ飯作ってくれるん？」

「どうせ司は作れないでしょ。前も酷かったもん。」

まあ、それは言い返せへん……。

それに話したいこともあったし丁度ええわ。

「ほな部屋行こか。僕も君に教えておきたいことあるし。」

「朝に言ってたやつだよね？私も相談あるし、ご飯は任せて。」

僕は何とかご飯にありつけそうで安心やわ。

桔梗ちゃんのご飯なら安心やしね。

この学校のこと。

一ヶ月後のこと。

学校内の要注意人物。

特別試験のこと。

そして何より僕がここに来た理由。

今日は長くなりそうや。

×

EP 僕と桔梗

「うつまあ。」

そう言つてハヤシライスを頬張る。

僕が産まれて初めて食べたハヤシライスは櫛田家のハヤシライスや。

僕は元々ビーフストロガノフが重たくて苦手で

そのパチもんみたいなハヤシライスが出てきたときは

わざわざ家に来て桔梗ちゃんに作つてもらたもん残すのも

悪い悪いやろうし、そう思うて渋々食べたのが切っ掛けやった。

僕は全国のハヤシさんに謝つた。

めっちゃ美味しいやんこれ。

櫛田家のハヤシライスがたまたま僕に合ったのか

それとも家のビーフストロガノフが合わんのか分からんけど

そっから何回か家で作つてもらた。

「相変わらず美味しそうに食べるよね。」

謙遜か？一瞬そう思うたけどそんな気を今さら使う仲でもないし

本音で言うてんのやろうね。

「いやあ、僕桔梗ちゃんの作るご飯でハヤシライスが अच्छちゃん好きやわ。」

「ふーん、あつそ。」

そんな他愛ない話をしながら食べる遅めの昼食。

僕は行儀悪いと思いつながらこの学校のことを話した。

- ・この学校は君らが考えているような楽園ではないこと。
- ・毎年退学者を数名絶対に出しているということ。
- ・教師ないし運営側は君の中学校でのやらかしを把握していること
- ・そして、それは恐らく生徒がポイントで購入できるということ。

「なにそれ……せつかく誰もいないここに来たのに。」

高育校

なぜか堀北はいるし、学校が生徒の秘密を売る？ふざけんなよくそが。」

おお、やっぱ桔梗ちゃんはそっちの方が違和感ないわ。

僕の知ってる桔梗ちゃんはいつもそっちの桔梗ちゃんやったし。

僕は最後の一口を頬張り、桔梗ちゃんにこれからの方針を話始める。

「堀北ってあれやろ？僕らの中学で特進クラスやった頭のええ子。

なんやそれでいきなり『はじめまして』なんて言うて来たんかいな。」

まるで日が沈んだような昏い瞳で桔梗ちゃんは床を見つめる。

沈黙。そして一言。

「うん。そう。」

僕は別にこの子にそこまで深く関わろうとは思ってない。

桔梗ちゃんがたまたま傷ついて投げやりになったタイミングで

僕がたまたま君の傷口を知った上で気にせえへん人種やっただけや。

だから別に咎める必要はないんやけど……。

なんやもつたないやん。

自分のエゴを自覚しながら足掻く人間同類が

しようもない考えで潰れてまうんわ。

だから、つついっけ口に出してまう。

「君が何を考えてるんかよう分からんけど、しようもないこと考えるんはやめや。」

「……。」

俯く桔梗ちゃんは何を考えてんのかわからへん。
だから両頬を持って無理矢理顔を上げさせる。

「君の武器はなんや？」

君の武器は味方をぎよーさん作れることやろ？
アホみたいに勉強しか出来へん女に君が負けるかいな。
君はいつもみみたいに胡散臭い顔で笑ってたらええねん。
そしたら周りが勝手に着いてくるわ。」

「司は私の味方でいてくれる？」

「愛理の次くらいには大事にしたるわ。」

そう言うのと桔梗ちゃんはやつと笑った。

「なにそれサイテー、」

ぶうたれながら笑う桔梗は目を赤くさせて洗面所に向かった。
トラウマか知らんけど面倒なことにならんとええけどなあ。

——なんせ、さつき言うてた堀北鈴音。

学力成績はAクラス並み言う話や。

身体能力も決して悪くない。

人間関係にはちよつと難があるらしいけど……

何よりあの今期生徒会長の妹や。

僕が生徒会長狙ってる言うたら堀北はどんな反応するんかな。
これ以上、面倒なことにならんとええけど。

× × ×

「とりあえず僕が一ヶ月でやろう思うてることはこんな感じや。」
「ええ……。これ、本当に出来るの？」

今月の大まかな行動予定を桔梗と共有したら
疑心感満載という程の目で見られた。

「つていうかさ、愛理ちゃんを紹介はしてくれないの？」

私、司から紹介されないと……。

こつちから接触するのも変な感じにならない？」

「なんや氣い使わせて悪いな。」

でもなあ……愛理から言われたんや。

僕が愛理の傍おったら僕を通しての人柄しか見えへんから言うてたわ。

よう分からんけど愛理がそう決めたんなら仕方ないわ。」

「……ふざけんなよ」

「何か言うたか？」

僕がそう返せば、桔梗ちゃんは困ったように笑いながら答える。

「うーん。私は言ってることすこし分かるかなって……。

ほら、司は茶柱先生と一悶着あったから

ちよつとクラスで浮いてるけど

あれがなかったら平田君みたいに

女の子にキヤーキヤー言われてたと思うよ？

そうなたらさ、愛理ちゃんに近寄ってくる女の子つて

司目当ての女の子ばつかになりそうな氣がするんだよね。」

「そういうもんかなあ。」

「そーいうもんなの。」

「女の子つて結構シビアだよ。」

何て言うかマウント取り合う感じ。

仲良く見えてもお互いの中で言葉にしなくても

無意識に上下関係みたいなのが出来上がっちゃってたりするし。

司が言つてた実力至上主義の学校の正体の件を知つてたのなら

尚更早めに見極めたい氣持ちだけは分かるかな。」

それはそれで鬱陶しいな。

近寄ってきた所で僕が愛理以外を見ることはないけど
まあ、愛理が選んだんならそれでええわ。

「ほな、一ヶ月後にでも機会作ってみるわ。

それよりいまは僕の方を手伝ってくれや。

桔梗の方もついでに手伝ったるから。」

「もちろん。精々私のために、私を上手く使ってね。」

僕らの目的は一致してる。

僕は迎えたい結末の過程として

桔梗はそれそのものが存在意義故に

—— まずはクラスを二分させる。

×